

狩野川水系河川整備計画(変更)の目標

令和8年1月21日

国土交通省 中部地方整備局
沼津河川国道事務所

①現行河川整備計画期間の取り組み·····

【 P.2～P.13】

- ・狩野川水系河川整備計画における現状(治水)
- ・狩野川流域におけるリスク
- ・流域のリスクを軽減する取り組み
- ・狩野川水系河川整備計画における現状(利水・環境・総合土砂)

②河川整備計画の目標に関する事項·····

【 P.14～P.23】

- ・洪水、津波、高潮等による災害の発生の防止又は軽減に関する目標
- ・河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持に関する目標
- ・河川環境の整備と保全に関する目標
- ・総合的な土砂管理の対応

①現行河川整備計画期間の取り組み

<治水>

現状

- ・現行の狩野川水系河川整備計画では、狩野川台風に次ぐ規模の洪水により発生する洪水流量流下時の被害軽減を図るため、主に河道掘削、樹木伐開、堤防整備による治水対策を進めてきた。
- ・気候変動に伴う降雨量増大で流量が増加することに伴い、流域の被害リスク増大が示されている。

課題

- ・気候変動に伴う被害リスクの増大に伴い、あらゆる関係者が協働して流域全体で行う「流域治水」の取り組み及び、河川管理者が行う治水対策のさらなる推進が必要である。

<利水・環境>

現状

- ・河川流況については、流水の正常な機能を維持するため必要な流量を満足している。
- ・河川環境については、狩野川本川の直轄管理区間には堰のような流れを止める横断工作物がなく、魚類が回遊しやすい環境が保たれているが、場所によってはワンド等の「生物の生息・生育・繁殖の場」が減小傾向であり、狩野川本川や柿田川では外来種が近年増加傾向となっている。
- ・人と川の触れ合いについて、流域3箇所でかわまちづくり事業を行うなど、積極的に推進している。

課題

- ・気候変動に伴い、気候が極端化し、洪水リスクと同時に渇水リスクも上昇する可能性がある。 追記
- ・従来の環境施策に加え、ネイチャーポジティブ等の社会情勢を踏まえた充実が必要であることから、引き続き良好な環境を保全していくとともに、現状の課題を解決していくため、治水対策と同様に河川環境についても目標を明確にして、在来種等の生息・生育・繁殖の場を保全・創出していく必要がある。

<総合土砂>

修正

現状

- ・狩野川流域において、現状の土砂動態は概ね動的平衡状態にあり、近年は河床高や海岸汀線などに大きな変化は見られない。

課題

- ・気候変動に伴う降雨量増大による土砂流出および河床動態変化を把握するため、関係機関との連携およびモニタリングの継続が必要である。

→これら流域の課題を踏まえ、河川整備計画の変更を検討する必要がある。

狩野川における過去の被害

第1回流域委員会資料再掲

狩野川水系

- 昭和43年2月に工事実施基本計画を策定し、その後、平成12年12月に基本高水のピーク流量を狩野川(大仁地点)4,000m³/sとする河川整備基本方針を策定。
- 昭和40年に狩野川放水路が完成し、本川の外水氾濫による被害は軽減されたが、支川の越水は発生している他、内水被害は頻発している。

狩野川の主な洪水と治水対策

【】:主な被害箇所(河川)

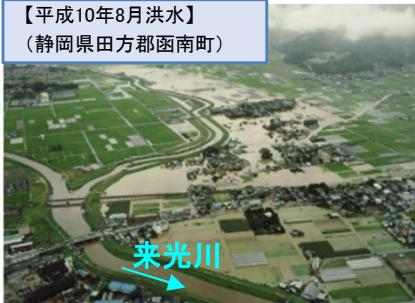
昭和2年	直轄河川改修事業着手 計画高水流量 1,700m ³ /s(大仁地点)
昭和23年9月	台風21号(アイオン台風)【支川 大場川・来光川】 床上浸水346戸、床下浸水222戸
昭和24年	狩野川放水路へ 1,000 m ³ /s 分派する改修計画に変更
昭和33年9月	台風 21号【支川 大場川・来光川】 負傷者1名、家屋全壊1戸、半壊4戸、床上浸水117戸、床下浸水217戸
昭和33年9月	台風 22号(狩野川台風)【狩野川本川・支川 大場川・来光川】 死者684名、行方不明169名、家屋全壊261戸、流失697戸、半壊647戸、床上浸水3,012戸、床下浸水2,158戸
昭和34年8月	台風 7号【狩野川本川・支川 来光川】 死者3名、負傷者34名、家屋全壊128戸、半壊537戸 床上浸水1,308戸、床下浸水2,094戸、浸水面積416ha
昭和36年6月	前線【狩野川本川・支川 大場川】 家屋全壊9戸、流出29戸、半壊1,195戸 床上浸水6,608戸、床下浸水6,366戸、浸水面積5,000ha
昭和38年	狩野川総体計画策定(計画流量の改訂) 計画高水流量4,000m ³ /s(大仁地点)、狩野川放水路分派量 2,000m ³ /s
昭和40年	狩野川放水路・神島捷水路完成
昭和43年2月	狩野川系工事実施基本計画策定 計画高水流量4,000m ³ /s(大仁地点)、狩野川放水路分派量 2,000m ³ /s
昭和51年8月	前線【支川 黄瀬川】 床上浸水44戸、床下浸水269戸
昭和57年8月	台風 10号 床上浸水575戸、床下浸水878戸、浸水面積794ha
昭和57年9月	台風 18号【支川 柿沢川】 家屋全壊流出1戸、床上浸水190戸、床下浸水449戸、浸水面積302ha
平成6年	伊豆箱根鉄道来光川橋梁特定構造物改築事業完成
平成10年8月	前線【支川 来光川・柿沢川】 家屋全壊 3戸、半壊 2戸 床上浸水284戸、床下浸水481戸、浸水面積 371ha
平成10年9月	台風 5号【支川 柿沢川】 床上浸水62戸、床下浸水144戸、浸水面積148ha
平成11年	宗光寺川・戸沢川救急内水対策事業完成
平成12年12月	狩野川水系河川整備基本方針策定 計画高水流量4,000m ³ /s(大仁地点)、狩野川放水路分派量 2,000m ³ /s
平成14年10月	台風 21号 家屋全壊1戸、半壊2戸 床上浸水975戸、床下浸水280戸、浸水面積93ha
平成14年	来光川 河川災害復旧等関連緊急事業完成
平成16年10月	台風22号 家屋全壊4戸、半壊2戸、床上浸水351戸、床下浸水623戸、浸水面積147ha
平成17年8月	台風 11号 床上浸水 50 戸、床下浸水 142 戸、浸水面積 80ha
平成17年12月	狩野川水系河川整備計画策定 整備計画目標流量 3,100 m ³ /s(大仁地点)
平成19年9月	台風9号 床上浸水 247 戸、床下浸水 477 戸、浸水面積 428ha
平成20年	狩野川床上浸水対策特別緊急事業(四日町排水機場ポンプ増強)
平成23年9月	台風 15号 床上浸水 4 戸、床下浸水 11 戸
平成25年	狩野川特定構造物改築事業(黄瀬川橋)完成
平成28年12月	狩野川水系河川整備計画策定(変更) 整備計画目標流量 3,100 m ³ /s(大仁地点)
令和元年10月	台風19号(令和元年東日本台風) 床上浸水 623 戸、床下浸水 627 戸、浸水面積 850ha
令和3年7月	前線【支川 黄瀬川】 家屋全壊1戸、床上浸水9戸、床下浸水13戸
令和5年8月	狩野川水系河川整備基本方針策定(変更) 整備計画目標流量 4,600 m ³ /s(大仁地点)

主な洪水被害

【狩野川台風(昭和33年9月)】
(静岡県伊豆の国市)



【平成10年8月洪水】
(静岡県伊豆の国市)



【平成16年10月洪水】
(静岡県沼津市)



【平成19年9月洪水】
来光川・柿沢川の出水状況



【令和元年東日本台風(令和元年10月)】
(静岡県沼津市)



【令和3年7月洪水】
(静岡県沼津市・駿東郡清水町)

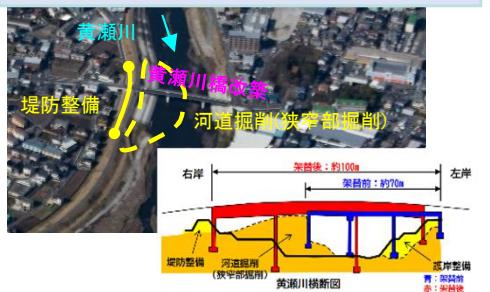


これまでの治水対策

- 狩野川放水路の整備
- 神島捷水路の整備
- 伊豆箱根鉄道来光川橋梁特定構造物改築事業
- 宗光寺川・戸沢川救急内水対策事業

- 来光川 河川災害復旧等関連緊急事業
- 狩野川床上浸水対策特別緊急事業
(四日町排水機場ポンプ増強)
- 狩野川特定構造物改築事業(黄瀬川橋)

狩野川特定構造物改築事業(黄瀬川橋)



四日町排水機場



狩野川放水路(S40完成)



狩野川放水路による流域の治水安全度向上

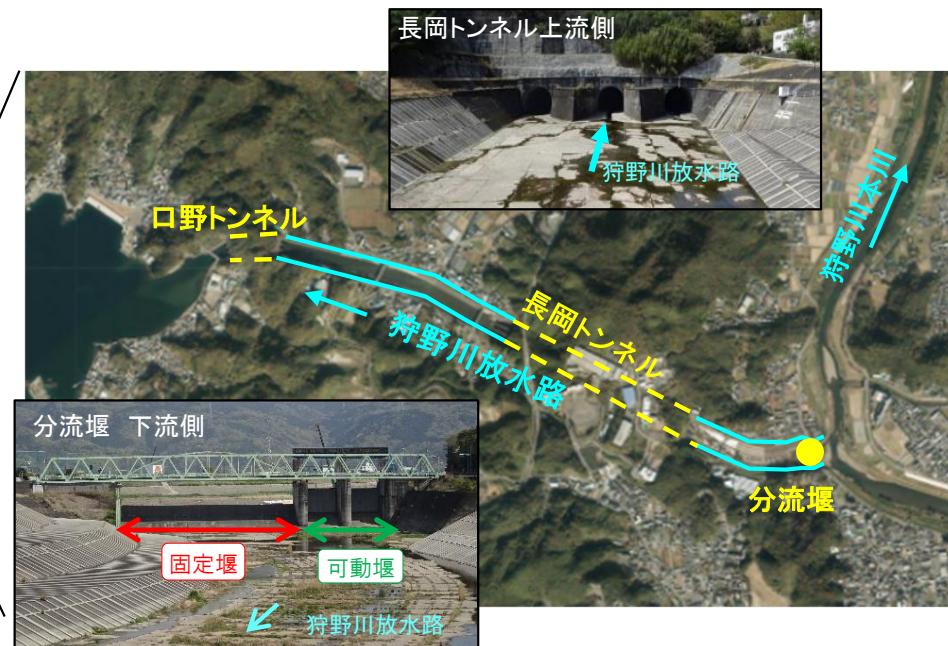
狩野川水系

○ 狩野川放水路は昭和40年の完成から60年が経過し、令和7年10月末までに延べ142回の分派を実施している。

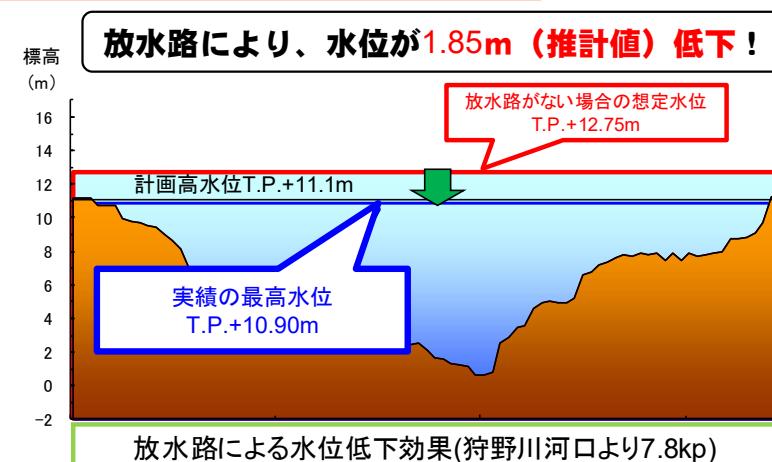
○ 令和元年東日本台風では、上流の湯ヶ島雨量観測所において観測史上最大の総雨量(778mm)を観測した。

○ 狩野川放水路により、狩野川本川水位が7.8k付近で約1.85mの水位低減効果があったと推定されており、堤防決壊等は発生しなかった。

狩野川放水路 施設概要

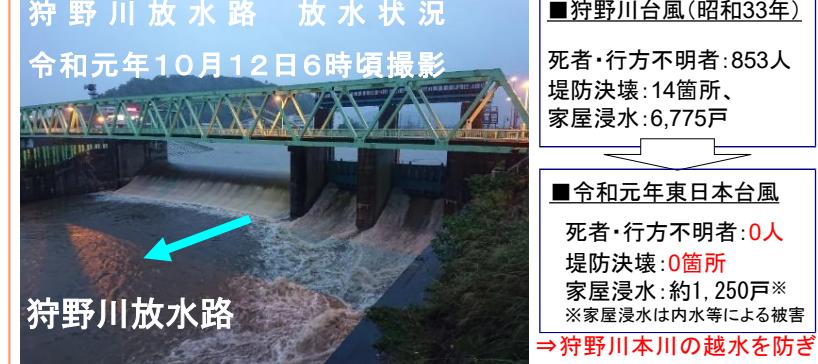


令和元年東日本台風の水位低減効果



狩野川放水路 放水状況

令和元年10月12日6時頃撮影



■狩野川台風(昭和33年)

死者・行方不明者:853人
堤防決壊:14箇所、
家屋浸水:6,775戸

■令和元年東日本台風

死者・行方不明者:0人
堤防決壊:0箇所
家屋浸水:約1,250戸※
※家屋浸水は内水等による被害

⇒狩野川本川の越水を防ぎ、
人的・物的被害を軽減

平常時



令和元年東日本台風

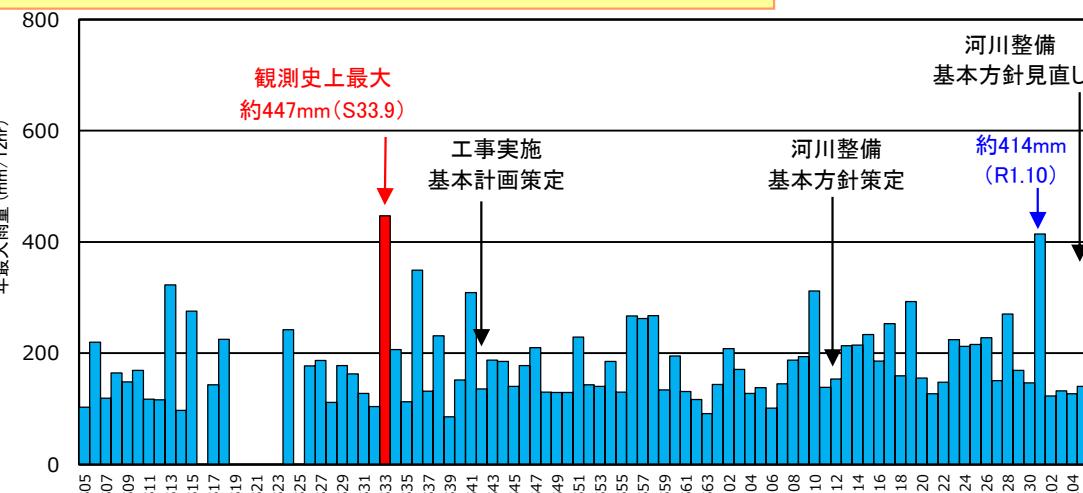


頻発する集中豪雨・気候変動によるリスク

狩野川水系

- 令和元年東日本台風では、戦後最大の被害を発生させた狩野川台風を超えるような降雨により、浸水家屋約1,250戸の内水被害が中流域を中心に発生した。
- 令和3年7月出水では黄瀬川大橋橋梁の損傷、令和7年9月の集中豪雨による急激な水位上昇など、近年の降雨特性や気候変動による降雨量の増加など、出水リスクが高まっているため、流域一帯で対応を図る必要がある。

年最大12h雨量の経年変化（狩野川（大仁）上流域）



令和3年7月出水 橋梁・護岸の損傷



損壊した黄瀬川本宿の護岸

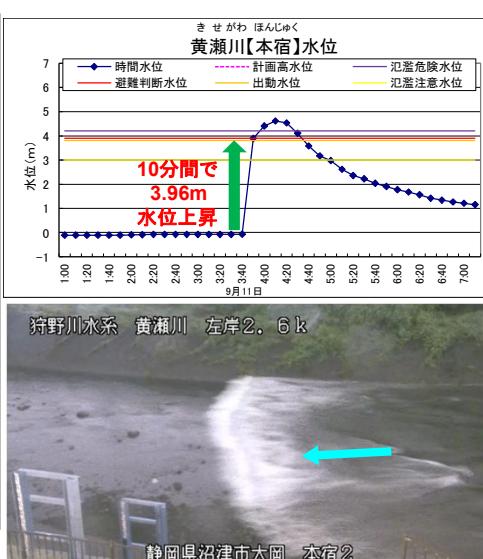
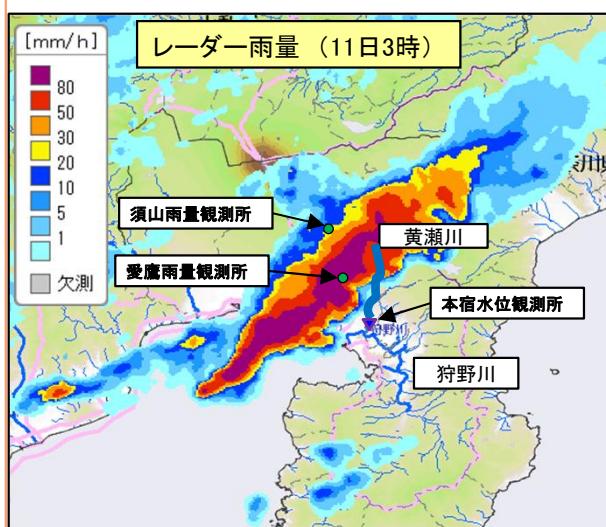


黄瀬川大橋橋脚、橋梁の損傷

令和元年東日本台風 内水被害発生状況



令和7年9月出水 集中豪雨による水位上昇



狩野川流域下流に交通及び資産が集中

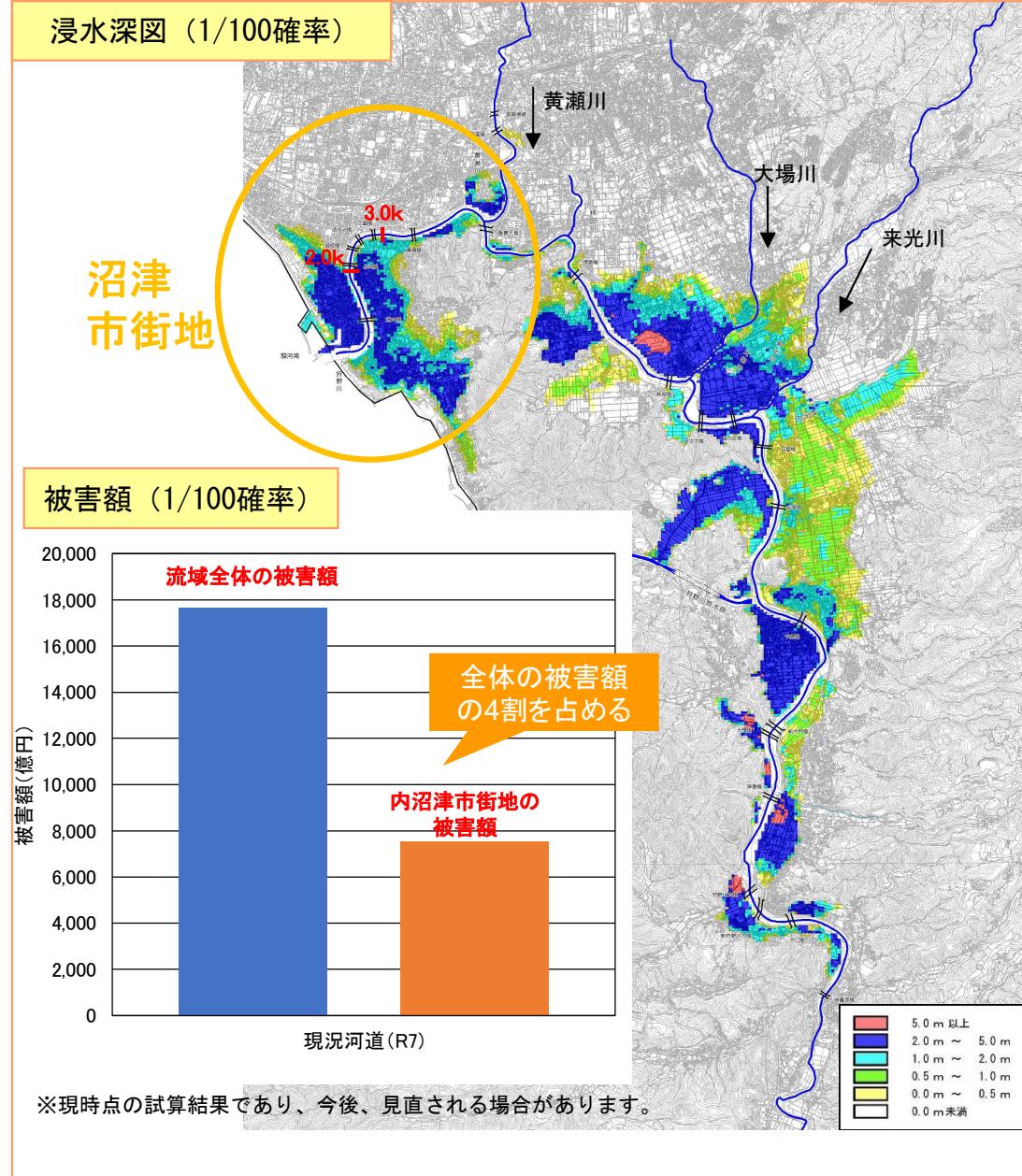
狩野川水系

- 狩野川流域下流は沼津市街地を有しており、産業流通・生活交通を支える国道414号、JR東海道本線が通過し、地域の広域交通の要衝となるため、資産価値が高く、水害発生時には被災者及び交通途絶のリスクが高い地域である。

狩野川沿川の交通網・建築物の立地状況



浸水深図 (1/100確率)



水害リスクを軽減する取り組み(流域治水プロジェクト2.0)

狩野川水系

○ 令和5年8月に、気候変動を考慮した流域治水プロジェクト2.0を公表し、流域全体で協力して治水安全度を向上させる取り組みを実施。

戦後最大洪水等に対応
した河川の整備



98%
(概ね5か年後)

農地・農業用施設の
活用



0市町村
(令和5年度末時点)

流出抑制対策の実施



16施設
(令和4年度実施分)

山地の保水機能向上
および土砂・流木災害対策



治山対策等の
実施箇所 2箇所
(令和5年度実施分)
砂防関係施設の
整備数 0施設
(令和5年度完成分)
※施工中 6施設

立地適正化計画における
防災指針の作成



1市町村
(令和5年7月末時点)

避難のための
ハザード情報の整備



洪水浸水想定
区域 8河川
(令和5年9月末時点)
内水浸水想定
区域 0団体
(令和5年9月末時点)

高齢者等避難の
実効性の確保



避難確保
計画 (令和5年9月末時点)
個別避難計画
8市町村
(令和5年1月1日時点)

氾濫ができるだけ防ぐ・減らすための対策

○堤防整備(国交省)



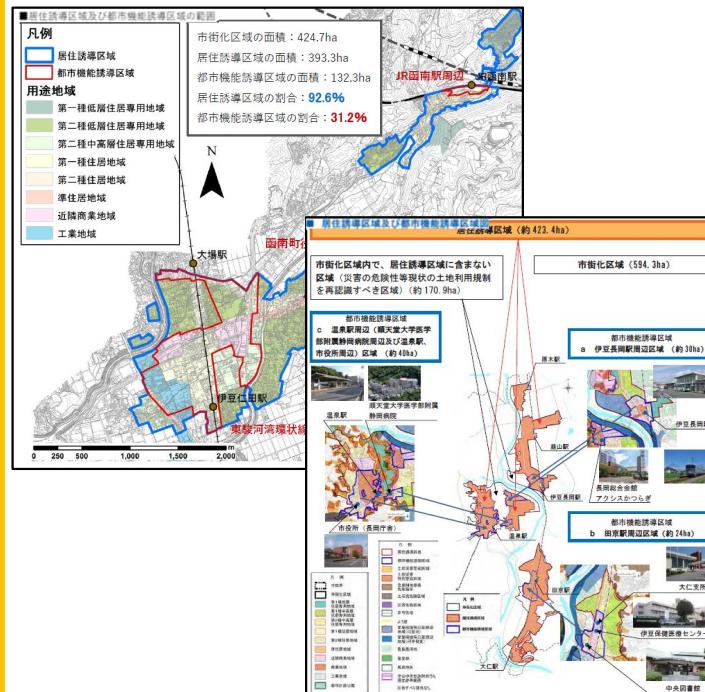
○雨水調整池堆積土砂の掘削(三島市)



堤防整備等により治水安全度の向上を図る他、
雨水調整池堆積土砂の掘削等により浸水被害の軽減を図る。

被害対象を減少させるための対策

○防災指針の追加による立地適正化 計画の変更(伊豆の国市、函南町)



伊豆の国市、函南町の2市町が連携し、防災指針を
追加した立地適正化計画の変更を実施予定。

被害の軽減、早期の復旧・復興のための対策

○要配慮者施設での避難訓練実施 (裾野市)



○防災出前講座の実施(伊豆市)



住民の主体的な避難行動を促す取組として要配慮
者施設での避難訓練の実施、地域の住民を対象と
した防災出前講座等の実施。

水害リスクを軽減する取り組み

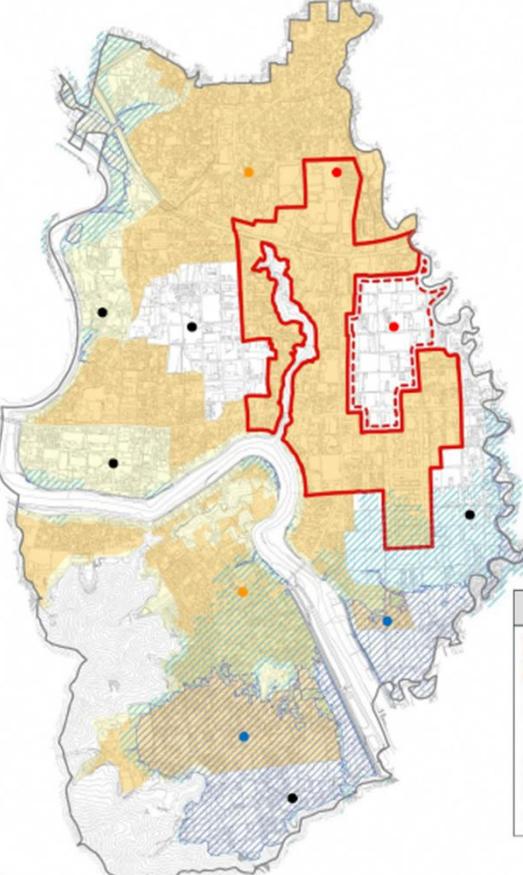
- 流域治水の取り組み(立地適正化による氾濫危険区域への居住制限や田んぼダム等)を実施し、被害を最小限にする取り組みを実施しているが、気候変動に伴う被害リスクの増大に対応するため、治水対策のさらなる推進が必要である。
- 現行の狩野川水系河川整備計画を推進し、更なる治水安全度を向上させる必要がある。

立地適正化計画の取組状況

<居住誘導区域の設定>

居住誘導区域の界線は、用途地域界を基本とし、急傾斜地崩壊危険区域、土砂災害特別警戒区域、土砂災害警戒区域、家屋倒壊等氾濫想定区域を除外して設定。

■都市機能誘導区域や居住誘導区域(清水町)



市町名	立地適正化計画作成
沼津市	H31.3
長泉町	H30.7
清水町	R3.3
三島市	R1.8
函南町	H31.3
伊豆の国市	H30.6
伊豆市	R6.3

凡 例	
■	都市機能誘導区域
□	都市機能誘導促進区域(町独自指定)
■	居住誘導区域
---	市街化区域(居住誘導区域外)
---	洪水浸水想定区域 浸水深2m未満
---	洪水浸水想定区域 浸水深2m以上
—	行政界

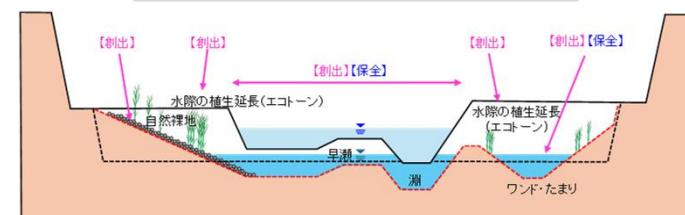
田んぼダムの取り組み(三島市)

三島市では、静岡県東部農林事務所と連携し、田んぼダムによる洪水緩和効果の検証・整備を行っている。



狩野川上流域における河道掘削

直轄管理区間上流付近は、河道の流下能力を確保するため、河道掘削を実施する必要がある。



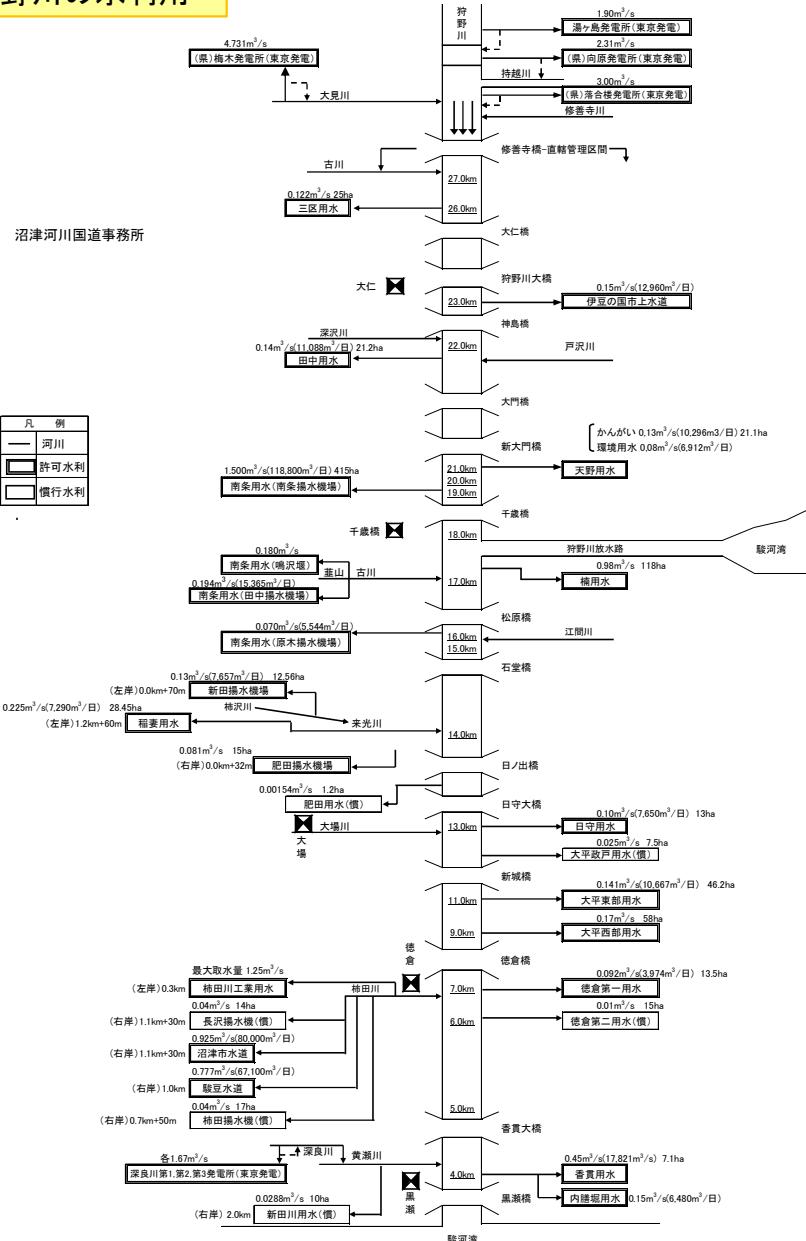
— 現況河道 --- 治水上必要となる河道
--- 環境の保全・創出も踏まえた河道(整備計画河道)

河川の適正な利用及び正常な機能の維持

- 狩野川(大臣管理区間)では、水道用水、農業用水、工業用水などとして水利用がされている。指定区間においては発電用水としても利用されている。
- 近年渇水被害は発生しておらず、正常流量6.2m³/sを概ね十分満足している。

狩野川の水利用

狩野川水系 水利使用模式図



主要地点の流況

河川現況流況表(大仁地点)

No.	西暦	和暦	最大流量 (m ³ /s)	豊水流量 (m ³ /s)	平水流量 (m ³ /s)	低水流量 (m ³ /s)	渇水流量 (m ³ /s)	最小流量 (m ³ /s)	年平均流量 (m ³ /s)
1	1969	昭和44年	309.57	25.14	17.88	14.82	10.54	9.67	25.17
2	1970	昭和45年	217.66	17.63	12.60	9.83	7.86	7.36	18.04
3	1971	昭和46年	165.13	17.39	12.98	9.38	7.11	6.60	16.10
4	1972	昭和47年	337.18	25.95	18.69	12.81	9.59	8.19	25.17
5	1973	昭和48年	102.96	19.97	14.57	11.54	8.74	8.26	17.72
6	1974	昭和49年	182.16	24.84	16.32	11.41	7.01	6.58	22.94
7	1975	昭和50年	178.38	24.72	18.01	14.32	8.96	7.88	22.77
8	1976	昭和51年	356.12	24.48	18.40	14.27	9.63	8.69	23.98
9	1977	昭和52年	245.42	21.26	13.33	10.16	7.70	6.92	22.36
10	1978	昭和53年	178.46	12.78	10.88	9.53	7.70	7.26	13.04
11	1979	昭和54年	361.17	19.65	13.34	9.96	7.17	6.79	19.37
12	1980	昭和55年	175.33	26.20	18.58	14.99	10.74	9.83	24.02
13	1981	昭和56年	287.87	19.68	14.68	11.11	9.12	8.59	19.19
14	1982	昭和57年	740.72	27.51	14.81	11.79	5.09	5.03	27.82
15	1983	昭和58年	823.40	24.55	17.26	14.23	9.76	9.21	25.90
16	1984	昭和59年	127.58	10.90	9.21	8.06	6.41	6.02	10.81
17	1985	昭和60年	489.56	18.17	12.69	9.98	5.80	4.82	18.82
18	1986	昭和61年	93.46	18.77	13.16	8.03	6.64	4.74	16.05
19	1987	昭和62年	127.49	16.41	12.44	9.50	6.99	6.84	15.31
20	1988	昭和63年	223.51	20.48	13.40	8.30	5.96	5.52	20.00
21	1989	平成元年	259.27	29.49	20.59	14.60	7.57	6.12	27.47
22	1990	平成2年	380.66	23.08	16.87	13.72	9.15	8.30	24.96
23	1991	平成3年	576.69	26.65	17.66	12.95	10.34	8.64	29.57
24	1992	平成4年	208.25	26.27	19.41	14.82	10.44	9.63	25.12
25	1993	平成5年	248.65	26.65	16.87	13.18	9.80	8.52	24.47
26	1994	平成6年	142.23	14.41	11.97	9.68	6.84	6.41	14.42
27	1995	平成7年	262.89	18.98	10.79	8.06	5.58	5.42	18.12
28	1996	平成8年	243.68	14.36	10.80	7.67	6.11	5.29	13.92
29	1997	平成9年	208.09	13.83	10.29	8.65	7.46	7.02	14.03
30	1998	平成10年	510.33	33.67	22.21	15.38	8.89	8.11	31.52
31	1999	平成11年	239.42	22.24	15.88	10.35	6.49	6.16	21.59
32	2000	平成12年	205.52	20.32	14.45	9.85	7.47	7.06	17.88
33	2001	平成13年	618.75	20.84	14.07	11.36	9.07	8.06	21.45
34	2002	平成14年	371.25	21.59	15.42	12.68	9.24	8.74	22.66
35	2003	平成15年	713.60	26.59	19.42	15.15	9.28	8.27	28.50
36	2004	平成16年	279.66	24.89	18.73	14.35	10.82	10.25	25.32
37	2005	平成17年	1706.67	18.38	13.88	11.38	7.95	7.40	19.01
38	2006	平成18年	296.60	19.17	14.54	12.09	7.76	7.21	18.80
39	2007	平成19年	512.59	18.87	14.24	12.25	10.40	9.71	24.08
40	2008	平成20年	252.12	28.37	18.05	13.50	10.47	9.98	26.13
41	2009	平成21年	159.43	21.96	16.63	13.74	11.23	10.91	20.75
42	2010	平成22年	149.10	26.22	18.37	14.52	10.91	10.66	23.27
43	2011	平成23年	397.77	21.01	15.40	12.17	9.70	9.34	21.44
44	2012	平成24年	374.93	21.34	14.11	10.27	7.62	7.03	21.27
45	2013	平成25年	317.27	17.45	12.53	10.42	8.68	7.16	欠測
46	2014	平成26年	498.33	20.16	14.20	10.94	8.72	8.36	20.22
47	2015	平成27年	欠測	23.48	16.75	13.89	10.74	欠測	欠測
48	2016	平成28年	331.75	24.51	17.39	14.18	11.11	10.67	24.33
49	2017	平成29年	欠測						
50	2018	平成30年	207.65	25.48	17.73	12.35	9.33	8.92	23.81
51	2019	令和元年	951.29	25.42	16.01	9.37	7.56	7.24	26.05
52	2020	令和2年	195.15	24.94	17.26	13.39	9.61	9.03	26.74
53	2021	令和3年	570.45	20.60	14.77	11.37	7.60	6.99	21.37
54	2022	令和4年	586.55	20.66	14.03	9.39	6.11	5.16	19.35
55	2023	令和5年	527.78	18.35	12.69	9.02	6.65	5.59	17.64
H26～R5		平均	483.62	22.62	15.65	11.54	8.60	7.75	22.44
		最大	951.29	25.48	17.73	14.18	11.11	10.67	26.74
		最小	195.15	18.35	12.69	9.02	6.11	5.16	17.64
全期間 (S44～R2)		平均	362.78	21.79	15.32	11.68	8.43	7.70	21.54
		最大	1706.67	33.67	22.21	15.38	11.23	10.91	31.52
		最小	93.46	10.90	9.21	7.67	5.09	4.74	10.81

狩野川水利用模式図(R6.4時点)

河川環境の現状

狩野川水系

- 狩野川の河川環境は、魚類が回遊しやすい環境が保たれていることが確認されているなど、概ね良好な環境が保たれているが、近年、外来種が増加傾向など課題も見られる。

河川環境の特徴



【上流部】天城山麓を流下する上流部は、自然植生が残された渓谷であり、アマゴ、カジカ等の渓流に生息する魚類が多いほか、下流からの縦断的連続性が確保されており、アユ、カマキリ(アユカケ)、ウツセミカジカ(回遊型)等の回遊魚も確認されている。

【中流部】田方平野を蛇行しながらゆるやかに流れ、連続する瀬淵や中洲などが見られる。狩野川本川には堰等の横断工作物はなく、縦断的連続性が維持され、アユ、カマキリ(アユカケ)、ウツセミカジカ(回遊型)等の回遊魚が全川をとおして確認されている。水際から高水敷にかけては、トンボ類、チョウ類、セッカの生息場所や移動経路となるヨシやヤナギ類等の植生が広く分布している。

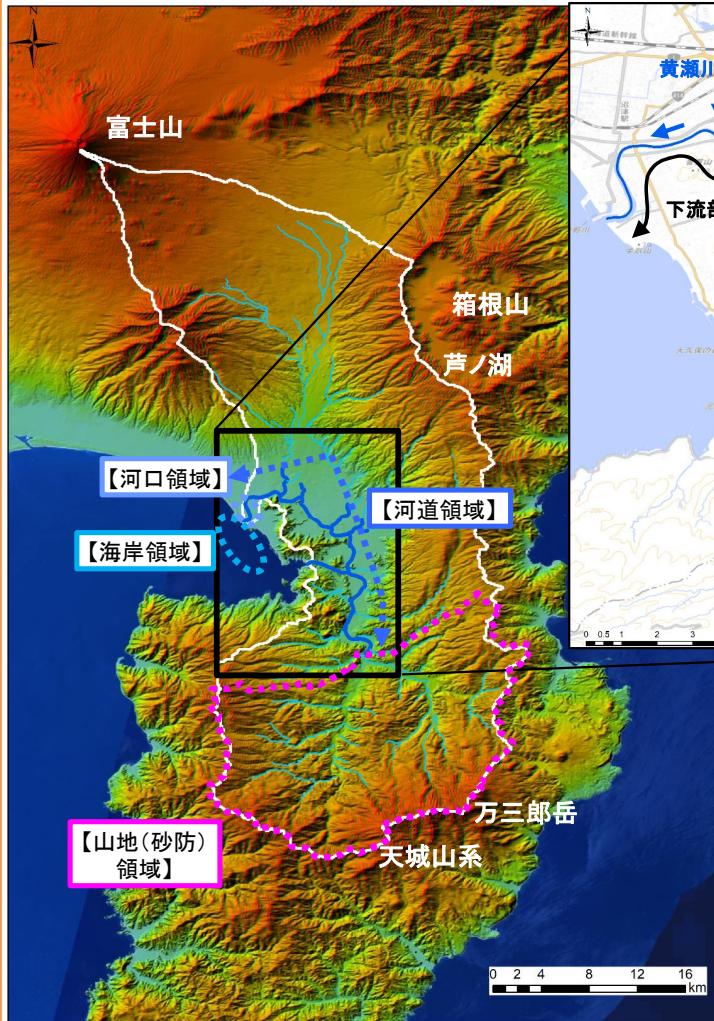
【下流部】都市域を流下し、公園や広場など、まちづくりと一体となった河岸整備により、安らぎの水辺空間を提供している。また、小規模ながらもシギ、チドリ類の渡りの中継地や、カモ類の集団分布地として機能しているほか、汽水魚のヒナハゼが生息する干潟が存在する。本川には横断工作物がなく、アユ、カマキリ(アユカケ)、ウツセミカジカ(回遊型)等の回遊魚が支障なく移動できる。

【柿田川】ミシマバイカモやナガエミクリをはじめとする希少な水生植物や、河川の中・上流部に生息するアマゴが生息するとともに、狩野川本川から移動してきたアユ(越冬アユ)やカマキリ(アユカケ)、ウツセミカジカ(回遊型)等の生物が確認されている。河岸は緑で連続的におおわれ、水と緑の織りなす良好な自然環境を形成している。近年はオオカワヂシャなどの外来種の侵入の影響が懸念されているが、関係機関や住民との連携により、外来種の脅威から失われたかつての類い希で貴重な生態系が見られる水と緑の空間を保全と創出する取組がなされている。

【黄瀬川】黄瀬川は、御殿場市に源を発し富士山三島溶岩流の流域を南流して下流では扇状地を形成する、狩野川水系最大の支川である。アユ等の回遊魚やカワセミ、ヤマセミ、カモ類の鳥類など多くの生物の生息場となっている。

- 狩野川では河床変動の経年変化及び河口部の状況、代表粒径等を整理した結果、砂利採取を中止した平成14年(2002年)以降は大きな変動が見られない。
- 河口部の状況については、湾曲部で砂州が発達しているものの、河口砂州は規模や形状を複雑に変化させながらフラッシュ・形成を繰り返しており、河口が閉塞される状況にはない。
- 狩野川本川には土砂移動を妨げる横断工作物はなく、土砂移動は概ね動的平衡状態にあり、現状では大きな問題は生じていない。

流域図(狩野川流域の特性)



山地(砂防)領域

- 狩野川水系では、昭和33年の狩野川台風を契機に昭和34年より狩野川直轄砂防事業として、これまで136基の砂防施設を整備してきた。
- 令和元年東日本台風は、昭和33年の狩野川台風を超える豪雨であり、一部で斜面崩壊等が発生したが、整備された砂防堰堤や森林整備等が効果を発揮し、流域内において大きな被害は発生していない。

ダム領域

- ダム領域は、治水、利水ダムも含めて対象なし。

河道領域

昭和40年(1965年)～平成14年(2002年)

- 狩野川では、砂利採取が平成14年(2002年)まで実施されており、河床高は低下傾向にある。昭和50年からの累計採取量は約45万m³に及ぶ。

平成14年(2002年)～令和2年(2020年)

- 砂利採取中止以降、狩野川の河床高は概ね安定している(部分的な維持掘削等の区間を除く)。
- 放水路においては分派する洪水は年に2回程度であり、分派量の大きい洪水後においても、放水路河口部で顕著な変化はみられない。

河口領域

- 平成24年(2012年)において、湾曲部で砂州が発達しているものの、令和元年東日本台風時には砂州部がフラッシュされており、治水上大きな影響はない。

海岸領域

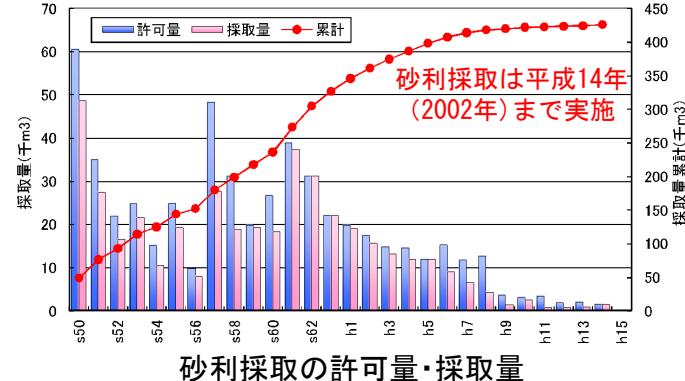
- 狩野川河口部からは、南側に向かって漂砂している傾向であり、北側の富士海岸への影響は、主に富士川からの漂砂となる。
- 南側には、海水浴場を始めとした県管理の海岸が位置し、海岸浸食を防止するための突堤が整備されているが、汀線に大きな変化は見られない。

【参考】狩野川の河床変動状況

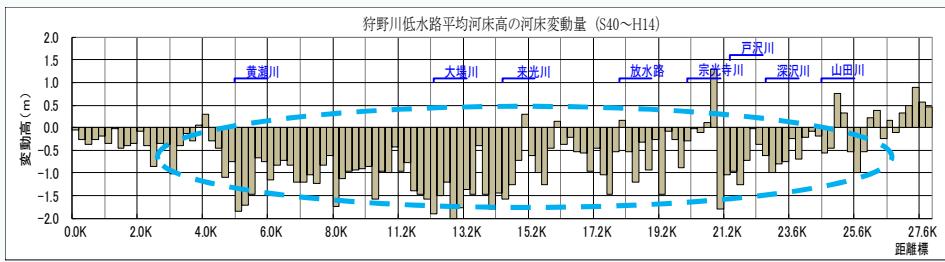
狩野川水系

- 狩野川では、砂利採取が平成14年(2002年)まで実施されており、河床高は低下傾向にある。
- 砂利採取の終了以降、狩野川の河床高は、堆積・洗掘を繰り返し概ね安定している(部分的な維持掘削等の区間を除く)。
- 河床材料の代表粒径や粒径分布の変化について経年的に比較した結果、顕著な変化は見られない。

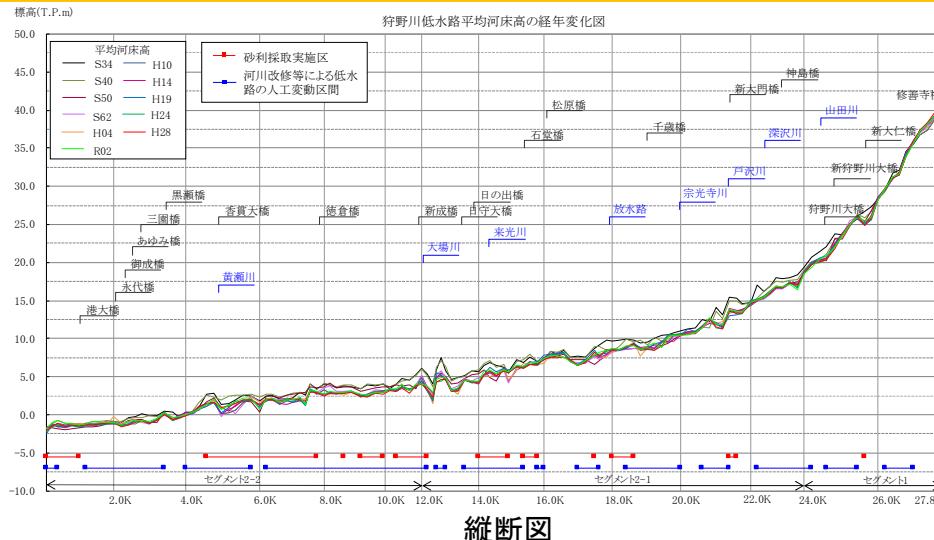
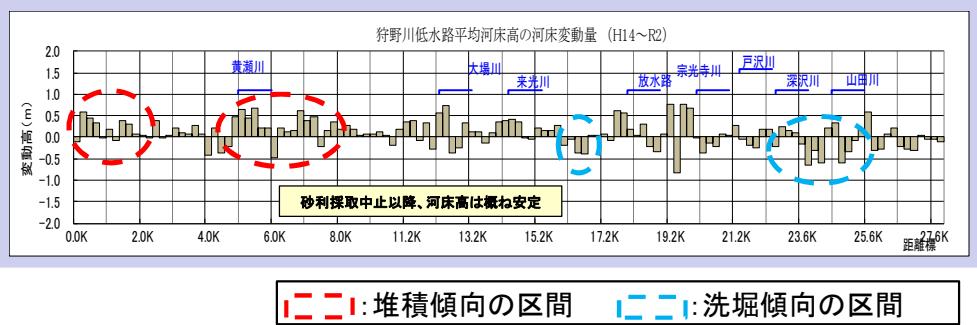
河道領域



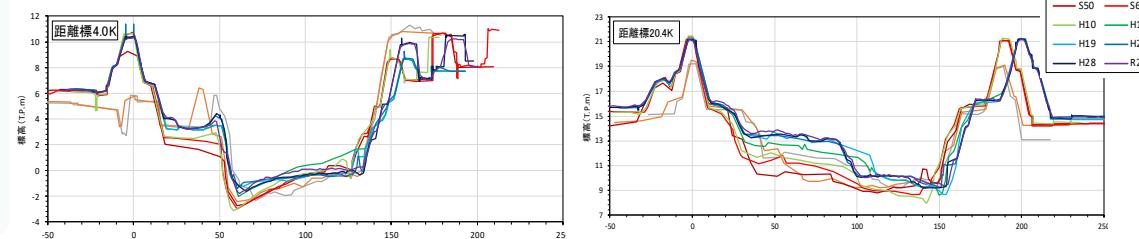
S40～H14



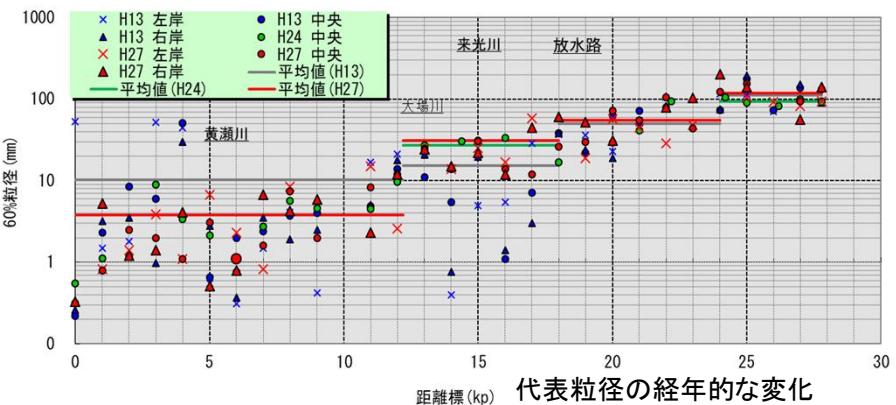
H14～R2



縦断図



横断図(距離標4.0K)



②河川整備計画の目標に関する事項

- 狩野川の将来目指すべき姿として、「連續性を基調とした川づくり」を基本理念とし、洪水から生命、財産を守り、地域が安定して暮らせる基盤の形成を図る中で、人々の心を再び狩野川に呼び戻し、かつての山から海まで一連となった川づくりを目指すものとする。

洪水、津波、高潮等による災害の発生の防止又は軽減に関する目標

- ・ 狩野川水系河川整備基本方針で定めた目標に向けた段階的な整備、氾濫域の資産の集積状況、土地利用の状況等を総合的に勘案し、治水安全度の向上を図る。
- ・ 下流域の主要な地点黒瀬において、気候変動によって2°C上昇した場合でも年超過確率1/70程度の規模の降雨により発生する洪水を安全に流下させることを目標とする。この際、流域における洪水調節機能2,700m³/sを確保のうえ洪水調節し、河道の配分は3,600m³/sとする。
- ・ この目標を達成することによって、既往最大洪水である狩野川台風について気候変動を考慮した場合においても洪水を安全に流下又は被害を軽減させることが可能となる。
- ・ また、目標を上回る河川整備基本方針規模等の洪水に対して、流域全体で被害をできる限り軽減する。

河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持に関する目標

- ・ 狩野川においては、現在、良好な河川環境のもとに駿豆地区の発展に欠かせない各種用水が確保されていることを踏まえ、今後も適正な利用や流水の正常な機能の維持が図られるように努める。

河川環境の整備と保全に関する目標

- ・ 狩野川が本来有している生物の生息・生育・繁殖環境及び多様な河川景観を保全・創出し、次世代に継承することを目指し、河川環境区分ごとに特徴的な環境要因の保全、減少・劣化傾向にある環境要因の創出に対して、目標を定量的に設定することで明確化し、具体的な対策につなげることで生物多様性の向上に努める。

総合的な土砂管理の対応

- ・ 山地領域から海岸領域まで一貫した総合的な土砂管理の観点から、国、県、市町などが相互に連携し、過剰な土砂流出の抑制や海岸線の保全に向けた適切な土砂移動の確保等について、関係者で取り組むとともに、気候変動に伴う降雨量増大による土砂流出および河床動態変化を把握するため、関係機関との連携およびモニタリングを継続していく。

洪水、津波、高潮等による災害発生の防止又は軽減に関する目標

○ 過去の水害の発生状況、流域の重要性やこれまでの整備状況などを総合的に勘案し、**狩野川水系河川整備基本方針に定められた内容に沿つて治水安全度の向上を図る。**

狩野川水系整備計画の目標

- 狩野川水系河川整備基本方針で定めた目標に向けた段階的な整備、氾濫域の資産の集積状況、土地利用の状況等を総合的に勘案し、治水安全度の向上を図る。
- 狩野川においては、下流域の主要な地点黒瀬において、気候変動によって2°C上昇した場合でも年超過確率1/70程度の降雨により発生する洪水を安全に流下させることを目標とする。この際、流域における洪水調節機能2,700m³/sを確保のうえ洪水調節し、河道の配分は3,600m³/sとする。

■: 基準地点
●: 主要な地点

(単位:m³/s)

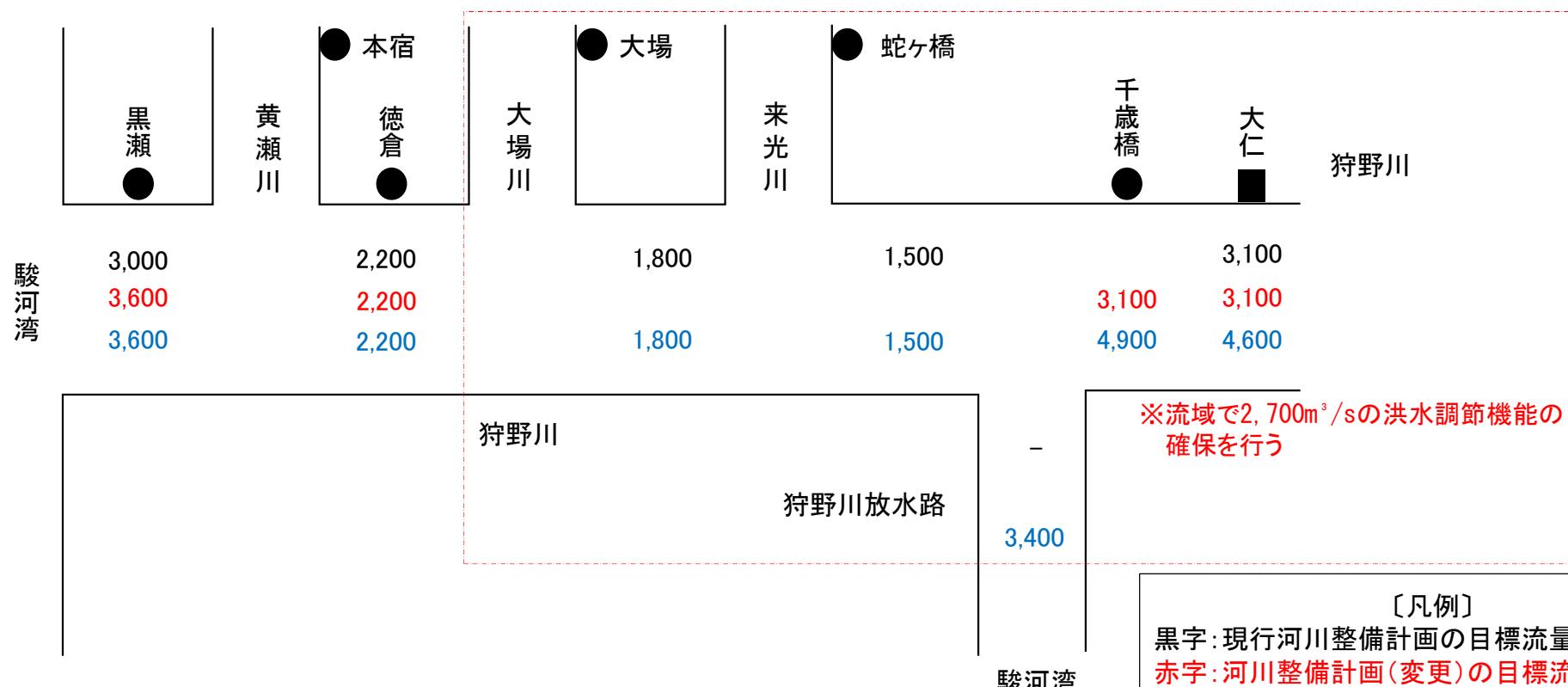


図 整備計画目標流量配分図

河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持に関する目標

河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持に関する目標

狩野川水系

- 令和5年8月に変更した狩野川水系河川整備基本方針において、新たに大仁地点で流水の正常な機能を維持するために必要な流量を年間6.2m³/sと定めた。
- 現状では、河川流況に見合った適正な水利用が行われていることから、今後も適正な利用や流水の正常な機能の維持が図られるように努める。
- 流水の適正な利用・管理を行うため、雨量、水量等を観測・把握し、関係機関や地域住民に対して情報提供を行うとともに、渇水対策が必要な場合は、水利用者による水融通の円滑化等を関係機関と連携して推進する。

正常流量の基準地点

▶ 基準地点は以下の点を勘案し、大仁地点とする。

- ①水利用が盛んな区間の上流に位置する
- ②過去の水文資料が豊富にある
- ③安定的に且つ確実に管理が可能

正常流量の設定

▶ 大仁地点における流水の正常な機能を維持するため必要な流量は、動植物(魚類)等を考慮し6.2m³/sとする。

項目	単位	かんがい期 (5/1~9/30)	非かんがい期 (10/1~4/30)
正常流量	(m ³ /s)	6.2	6.2
	(m ³ /s/100km ²)	(2.0)	(2.0)
現況流況 平均	(m ³ /s)	10.5	8.5
	(m ³ /s/100km ²)	(3.4)	(2.8)
w=1/10	(m ³ /s)	7.5	6.1
	(m ³ /s/100km ²)	(2.4)	(2.0)



低水流量観測の実施



水質調査の実施

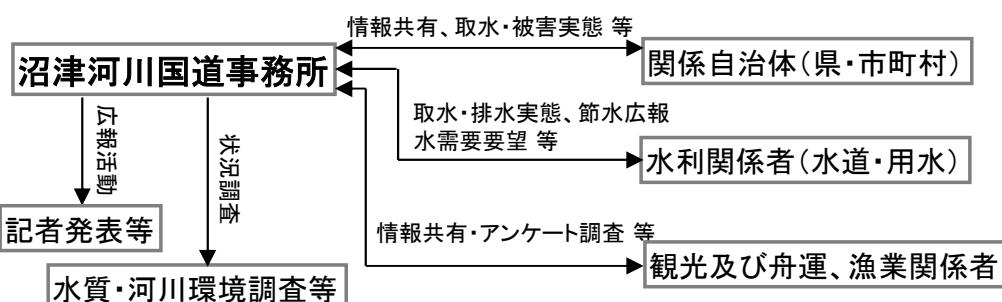
流況

▶ 狩野川流域は多雨地帯であり、水量が豊富で安定している。

▶ 過去に顕著な渇水被害は発生しておらず、大仁地点の現況流況で平均渇水流量約8.5m³/s、平均低水流量約11.8m³/sとなっている。

項目	単位	豊水流量	平水流量	低水流量	渇水流量
平均	(m ³ /s)	21.90	15.41	11.78	8.53
最大	(m ³ /s)	33.67	22.21	15.38	11.23
最小	(m ³ /s)	10.90	9.21	7.67	5.09
w=1/10	(m ³ /s)	14.41	10.88	8.30	6.11
	(m ³ /s/100km ²)	(4.72)	(3.56)	(2.72)	(2.00)

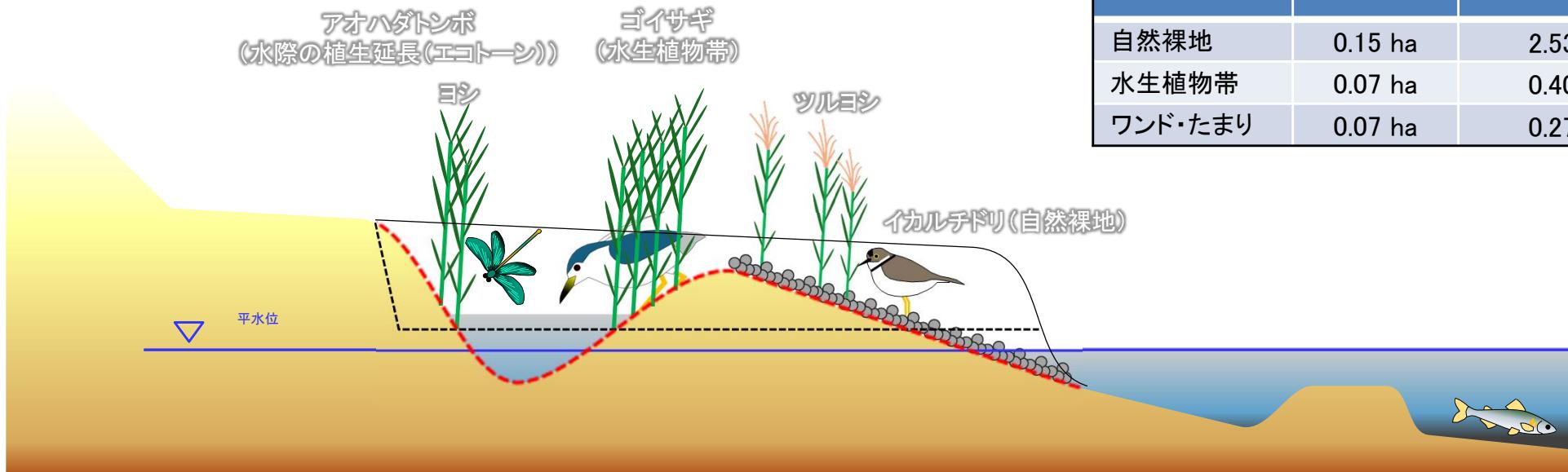
渇水時の連絡調整イメージ



河川環境の整備と保全に関する目標

- 河川の各環境要素(自然裸地、ワンド等)について、「保全」、「創出」の環境定量目標を設定し、河川環境の目指すべき水準を明確化する。
- 区分ごとに多自然川づくりや自然再生事業により、河川整備計画期間中に整備する創出量を設定する。
- 河川環境の保全・創出のため、具体的な対策を整理していく。

■区分4(例)



環境要素	創出量	環境定量目標
自然裸地	0.15 ha	2.53ha
水生植物帯	0.07 ha	0.40ha
ワンド・たまり	0.07 ha	0.27ha

【ワンドの創出】

- ・寄洲に魚類や昆虫類の生息・繁殖・避難場となるワンドを創出

【自然裸地の創出】

- ・水際を平水位以下した斜め掘削により、鳥類の生息・繁殖場となる自然裸地を創出

【瀬淵の保全】

- ・みお筋は改変しないことを基本とし、魚類の生息・繁殖場となる瀬・淵等を保全

【水生植物帯の創出】

- ・ワンドの周囲になだらかな水際部を造成することで、鳥類や昆虫類の生息・繁殖場となる水生植物帯の創出を図る。

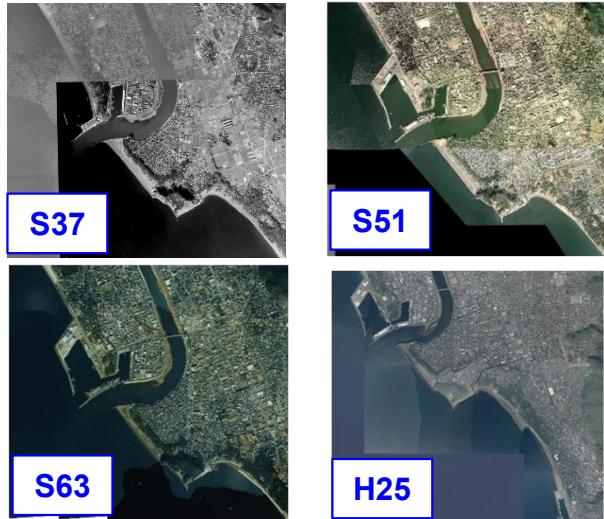
総合的な土砂管理の対応

総合的な土砂管理の対応

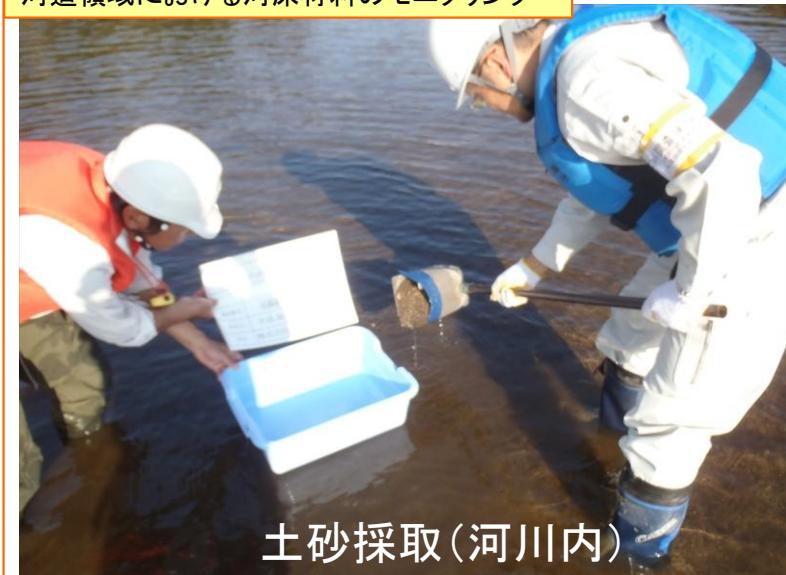
狩野川水系

- 山地領域から海岸領域まで一貫した総合的な土砂管理の観点から、国、県、市町などが相互に連携し、過剰な土砂流出の抑制や海岸線の保全に向けた適切な土砂移動の確保等について、関係者で取り組むとともに、気候変動に伴う降雨量増大による土砂流出および河床動態変化を把握するため、関係機関との連携およびモニタリングを継続していく。

河口・海岸領域における汀線の確認



河道領域における河床材料のモニタリング



山地(砂防)領域における砂防事業及び間伐実施

